

Résumé

The marine alga which is called "Kuroba-ginnanso" in Hokkaido has long been passed among us under the name of *Iridophycus cornucopiae* (POST. et RUPR.) SETCHELL et GARDNER. From the external appearance it is easily taken for *Iridaea*. However, the absolute absence of "besondere Faserhülle" is the character which legitimate the current classification of this species in the genus *Chondrus*. The result of the more detailed study on this alga and the discussion on its relation to the allied species in Japan will be published in future.

文 献

- 遠藤吉三郎 (1911): 海産植物学 p. 603.
—— (1917): Notes on Algae New to Japan VI. p. 77.
岡村金太郎 (1927): Marine Algae of Mutsu Bay and adjacent waters. 1. p. 11.
—— (1936): 日本海藻誌 p. 658.
KYLIN, H. (1928): Entwicklungsgeschichtliche Florideenstudien.
稲垣貫一 (1933): 忍路湾の紅藻 p. 30.
山田幸男 (1934): 得撫島, 特に家間附近産海藻目録 p. 42.
高松正彦 (1936): The marine algae from Kinkwazan Island, Miyagi Prefecture, Northeastern Honshu, Japan. p. 65.
—— (1938): Marine Algae from Tsugaru Strait, Northeastern Honshu, Japan. p. 51.
SETCHELL, W. A. and GARDNER, N. L. (1937): Iridophycus in the Northern Hemisphere, Proc. Nat. Acad. Sci., 23 (3). p. 170.
POSTELS, A. and RUPRECHT, F. J. (1840): Illustr. Alg., p. 18, pl. 38, b.
永井政次 (1941): Marine Algae of the Kurile Islands. p. 189.
山田幸男・田中剛 (1944): Marine Algae in the vicinity of the Akkesi Marine Biological Station. p. 72.

海苔養殖に於ける *Ectocarpus siliculosus*
(DILLW.) LYNGB. の 害

加 藤 孝*

本種は徳島県の河口附近等に周年見られる糸状の褐藻である。始め海底の竹、木、石等に発生し、灰褐色の毛状をなして波にゆられているが、やがて脱落して浮游生活を送る。本県ではそれが海苔ヒビに大量に巻きついて大

* 徳島県水産試験場

害を与えており、海苔業者は「アカダレ」と称して非常に嫌悪している。(この理由としては、本種が附着すると海苔の附着面をうばい二次芽の附着成長を阻害することが挙げられる。)近年では勝浦川口の高苔場に1955年11月海苔網を移植したところ、本種の浮游体に巻きつかれて、海苔芽が枯死し、約8割の高苔網を採取に至らずして除去するの止むなきに至つたという事例がある。筆者はこの害を防ぐ目的で生態と防除法について少しく調査・実験してみた。

本種の最も多い時期は11月中下旬から12月中下旬(水温17~12°C)と3月上旬から4月中旬(12~15°C)の間であり大体13~15°Cが繁殖の最適水温と考えられる。

場所としては前記の通り河口附近の波静かな所や、淡鹹水の混合する沿岸干潟に最も多く、底層を塊つて浮游している。

次に高苔網についたものを駆除する目的で、乾燥試験を試みたところ、晴天3時間で完全に死滅させ得た故、殺すだけなら極めて簡単である。しかし乍ら一般の高苔筈では2~3時間の干出は普通与えられておるので、本実験結果によれば、ヒビを特に取揚げて乾燥させる必要がないと思われるが、高苔筈に於いては、網自体の完全乾燥に相当の時間を要するため、網と共に本種も乾燥せしめるには、これよりはるかに多くの乾燥を与えなければならないものと考えられる。(本実験は本種を網より取り本種のみにて行つたものである。)

なお塩分濃度に対しては著しい広適鹹性を示し、実験結果からは純淡水にも高鹹水でも生存を続けることが出来ると思われる。

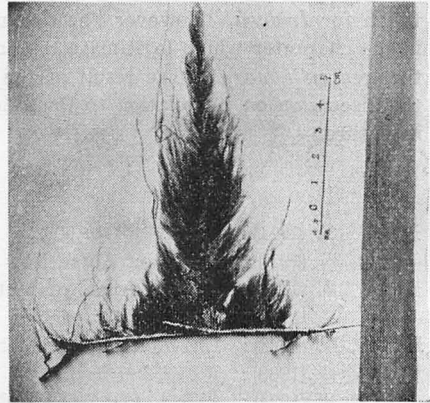


写真 女竹の枝に附着した
Ectocarpus siliculosus